17-9　授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：社会
単元（教材）:「アフリカ州について知ろう―歴史的な視点から」
対象：小中一貫七年生

授業者：西田直記

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

〇本授業はアフリカという、グローバル化の長期的過程の近代以降の局面で焦点となった地域を扱う。そのため、題材自体が既にグローバル・ヒストリーにとって大きな意味を持つといえる。
〇他方でアフリカは日本の児童生徒にとって、ヨーロッパやアジアに比べてなじみの薄い地域で、貧しいという漠然としたイメージが抱かれがちである。また中学校の授業でも、一般的に地理・歴史・公民の各分野で個別に扱われることが多く、そうした取り組みでは日本とのつながりはもちろん、アフリカの全体像や歴史的背景を児童生徒に把握させることが難しい。
〇以上の問題意識に立つ本授業は、アフリカ州に関する全 5 時間の単元の第一次として、歴史的な視座からアフリカを多角的に捉えることを主な目標としている。その際、馴染みのない地域に対して児童生徒に興味関心を持たせるための様々な工夫がみられた。
〇本カリキュラム開発の企図に照らしてまず興味深いのは、導入でアフリカの音楽を流し、生徒の聴覚に訴えかけたことである。もともとグローバル・ヒストリーはもともと「さわれる歴史」を当初のコンセプトとしたが、「聴覚」（聴く）を、グローバル化を実感するためのヴァリエーションとして提示した点で、今後への発展可能性がみられた。
〇また当初の企図に沿った取り組みとしては、アフリカ産の農産物で私たちの身近にあるコーヒー豆の実物を生徒に配布し、触れさせることで、日本とのつながりを効果的に実感させることができていたように思われる。
〇興味関心をかき立てるためにこれらの工夫をする一方で、アフリカの多様性や植民地化の問題、あるいは近代的な側面（写真）など、「固い」テーマにも正面から取り組み、両立させていた点が、今後の授業開発のモデルとしての意味を持つといえる。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

〇今後の継続的・発展的な取り組みに向け、比較的手軽で有益な補足情報を以下に記したい。
〇小田中直樹『歴史学ってなんだ？』118～123 頁では、アフリカの家屋のかたちからみる

家族観が紹介されている。同じく 20 世紀後半にブラック・ミュージックを吸収した英米のポップスが世界に浸透していく過程と、日本で「J-POP」が誕生する過程との関係も興味深い。アフリカと日本の比較、つながり、あるいは音楽の授業との接続可能性を考えるうえでも示唆に富むように思われる。

〇以上のことの詳細は松田素二ほか『新書アフリカ史』を参照。